

Title	労働貴族の古典的時代におけるフリントガラス製造工(その1)
Sub Title	The flint glass makers in the classic age of the labour aristocracy, 1850-1880
Author	松村, 高夫
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1977
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.70, No.3 (1977. 6) ,p.295(41)- 308(54)
JaLC DOI	10.14991/001.19770601-0041
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19770601-0041

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

労働貴族の古典的時代におけるフリントガラス製造工^{*}

(その1)

松村 高夫

序

本稿は、ブリテンにおけるフリントガラス製造工にかんする歴史的解明の試みである。その歴史を理解するために、労働貴族 Labour Aristocracy なる概念の適用を試みているが、同時に、その概念そのものがガラス製造工にかんする個別歴史研究を通して精緻・豊富化されることも意図している。個別歴史研究から得られた結論をただちに拡大し一般化することが妥当でないことは自明のことであるが、社会科学上の概念は、それが労働貴族のようにすぐれて歴史的な概念であるばあいにはとくに、個別歴史研究を通してより正確に展開されうるということもまた真実なのである。

フリントガラス製造工とその労働組合にかんしては、ウェッブ夫妻が注目したにもかかわらず、後世の歴史家によって殆んど研究されてこなかった。その主たる理由は、フリントガラス製造工組

* 本稿は、わたくしの *The Flint Glass Makers in the Classic Age of the Labour Aristocracy, 1850-1880, With Special Reference to Stourbridge*, Ph. D. thesis, University of Warwick, 1976. にもとづいている。わたくしは指導教授として4年間にわたり、厳格ではあるが心暖かい指導を続けてくださったR. ハリソン教授(ウォーリック大学社会史研究所所長)に、まず感謝しなければならない。しばしば提出した中間報告的論文にはかならずタイプで打たれた教枚のコメントが付されて、驚くべき短期間のうちに返却され、それにもとづいて教授とのあいだで討論がおこなわれるのが常であったが、その討論は、3時間ないし4時間に及ぶことがしばしばであった。そして、わたくしは、そこで指摘された弱点を埋め、つぎの中間報告を作成すべく各地に資料蒐集にかけたのだが、ハリソン教授のこうした絶えざる指導と激励がなかったならば、この研究は終っていなかったであろう。同じ社会史研究所のA. メンソン博士もわたくしのすべての原稿を読んで貴重な助言を与えてくれた。その他、社会史研究所のスタッフとわたくしと共に学んだ多くの学生に負うところは極めて大である。さらにE. テイラー博士、E. ホプキンス博士、G. クロシック博士にも多くのことを負っている。多数の図書館のスタッフはわたくしの研究を援助してくれたが、とくに、University of Warwick, British Library と、その分館Newspaper Library (Colindale), British Library of Political and Economic Science, Victoria and Albert Museum, Bishopsgate Institute および Glass Manufacturers Federation の図書館員にわたくしは感謝したい。さらに、Birmingham, Stourbridge, Brierley Hill, Sheffield をはじめとする多数のイングランドとスコットランドの図書館員に、また、Public Record Office, Stafford と Worcester の County Record Office のスタッフに、また、わたくしに会社記録の閲覧を許可してくれた Brierley Hill Crystal Company (Stourbridge) と Beatson, Clark and Company Ltd. (Rotherham) に謝意を表したい。最後にわたくしの学位論文の学外試験官であったS. ボラード教授(シェフィールド大学)には、口頭試験のさいに与えられた有益なコメントにたいし、とくに謝意を表したい。ここでは、多大な援助をいただいた日本人研究者の名前は省略されている。

合の機関誌である *Flint Glass Makers Magazine* (以下 *F. G. M. M.* と略) が、かなり長期にわたって所在不明となっていたために利用できなかったからである。ウェブ夫妻が『労働組合史』 *The History of Trade Unionism* (1894年初版) を書いたときには *F. G. M. M.* はすでにイギリスの「どの公共図書館にも保存されていない」ので、かれらはバーミンガム労働組合評議会 Birmingham Trades Council の書記の A. ハドルトンからその完全なワンセットを借用しなければならなかった。⁽¹⁾ シドニーは借用した機関誌から重要部分を抜粋しノートしたが、その256ページからなる手稿は現在ロンドン・スクール・オブ・エコノミックスのウェブ・コレクションに残されている。⁽²⁾ かれは *F. G. M. M.* を当時の労働組合の出版物のなかで「最良のもの」とよび、19世紀中期以来、約半世紀にわたる期間、「連続的刊行を享受した唯一のもの」との評価を与えた。⁽³⁾ D. N. サンディランドがミッドランドのフロントガラス製造工を研究した1920年代後半には、まだこの *F. G. M. M.* の完全なワンセットを「フロントガラス製造工組合バーミンガム支部の役員の好意により」⁽⁴⁾ 利用することができたが、その時以降、機関誌は所在不明となったのである。1961年にイギリス労働史学会の紀要編集者は「*Flint Glass Makers Magazine*はどうなったのだろう」と、学会会員につきのようによびかけた。

「これは1850年から今世紀初頭まで連続的に刊行され、ウェブ夫妻によって労働組合の刊行物のなかで最良のものといわれた。……バーミンガムのわが学会会員がその所在を発見することを希望する。」⁽⁵⁾

こうして1972年にスタウブリッジのガラス製造工プライス氏が完全なワンセットを所有していることが判明する。発見者のテイラー博士は、ただちに労働史学会の紀要編集者の R. ハリスン教授にその旨通告し、教授によってその全巻マイクロフィルム化がおこなわれたのである。⁽⁶⁾ 本研究は

注(1) S. & B. Webb, *History of Trade Unionism*, 1894 ed., p. 179. Alfred Haddleton 自身フロントガラス製造工であり、1885年から95年までバーミンガム労働組合評議会の第7代書記であった。(John Corbett, *The Birmingham Trades Council, 1860-1966*, 1966, p. 186)

(2) Webb Trade Union Collection, Section A. vol. XLIII-I; British Library of Political and Economic Science, London. ウェブはフロントガラス製造工以外にもガラス関係の労働者にかんする手稿を残している。それらを含めて以下のようなものがウェブのコレクションに所蔵されている。

a. Flint Glass Makers pp. 1-256.

b. Glass Blowers 257-260.

c. Glass Bottle Makers 261-332.

d. Plate Glass Bevelers 333-350.

e. Flint Glass Cutters 351-397.

f. Window Glass Workers: Pressed Glass Makers: Glass Founders: Glass Painters, etc. 398-408.

(3) S. & B. Webb, *History of Trade Unionism*, *op. cit.*, p. 197. そこにはこう書かれている。「この機関誌には(ガラス)産業にかんする多数の有益な情報や、TUCの特別報告や産業ならびに経済上の諸問題にかんする優れた記事が掲載されている。」(*ibid.*, p. 197, fn. 3)

(4) D. N. Sandilands, *The History of the Midland Glass Industry with Special Reference to the Flint Glass Section*, M. Com. thesis, University of Birmingham, 1929, Foreword.

(5) *Bulletin of the Society for the Study of Labour History*, no. 3, Autumn, 1961, p. 1.

(6) マイクロフィルム化された *F. G. M. M.* はウォーリック大学図書館が所蔵している。その再復写は許されていない。

この *F. G. M. M.* を基礎資料としている。

ウェブ夫妻だけでなく、他の同時代人たちも *F. G. M. M.* を高く評価していたことは注目すべきことであろう。たとえば、『バーミンガム・マーキュリー』紙は、1852年に *F. G. M. M.* を評して、「社会の、産業上の、そして教育上の諸問題が極めて説得的な記事のなかで論じられているが、その記事はガラス製造業界の職工たちがそれらの諸問題を充分論じうる高い知性をもっていたことを示している。」⁽⁷⁾と書いた。ガラス製造工が高い教育を受けた者であるという定説は、*F. G. M. M.* の論説の質の高さから生じたように見える。たしかに、この機関誌は当時の労働界の他の出版物よりも、内容においても、年4回ずつ連続的に刊行されたという点においても優れている。それは自らの組合だけでなく、労働運動全般にかんして有益な情報を提供してくれる。また、各号の約3分の1を占める統計数値は、組合員、失業者、死亡者、疾病者、移民等々にかんする情報を1851年から1897年まで連続的に与えてくれる。しかしながら、組合機関誌はその本来の性格から、後日歴史家の研究のためにはなく組合員のために刊行されたものであるから、そこに掲載された論説等が客観的事実を歪め、組合の執行部、とくに総書記の思想や方針にそって記述されたということがしばしば生じたであろう。ウェブが抜粋しノートしたのは、主として総書記や中央委員会の見解が表明されている巻頭論説およびそれに類するものであった。とすれば、ヨリ客観的な分析をするためには、機関誌に掲載された組合員からの多数の通信——それらはしばしば執行部の方針とは反対であることもあった——にも特別の注意を払わねばならないだろう。じじつ、かような方法による *F. G. M. M.* の検討は、フロントガラス製造工組合がウェブ夫妻の描いたような統一した見解をもつ組合ではなく、いくつかの問題をめぐる鋭く対立する見解を内包する組合であったという主張に導くのである。さらに、機関誌上で展開された議論と組合により現実に実施された政策とのあいだには差異があったのであり、両者は混同されてはならないということも、指摘する必要がある。じじつ、移民政策や協同組合設立にみられたように、議論は激しく誌面を飾ったが、じっさいの政策はそれに伴わなかったという多くの事例があるのであり、ウェブには両者の混同がみられ

J. R. Price氏の所蔵になる *F. G. M. M.* の1851年から1897年までの完全なセットは21巻から成っており、各巻500ページ以上1000ページ以下からなっているが、なかには1000ページを越える巻もある。大略3年分が1巻におさめられており、わたくしが研究対象とする期間の巻数はつぎのごとくである。第1巻、1851年—53年。第2巻、1853年—57年。第3巻、1857年—60年。第4巻、1860年—63年。第5巻、1863年—67年。第6巻、1867年—71年。第7巻、1871年—74年。第8巻、1874年—77年。第9巻、1877年—79年。第10巻、1879年—80年。第11巻、1880年—81年。

このPrice氏所蔵のワンセット以外に現在までに所在が判明している *F. G. M. M.* は、以下のごとく断片的である。Stourbridge Reference Library が1巻および2巻(1851年—57年)と8巻(1876年11月号のみ)、9巻(1877年5月号のみ)を所蔵している。Bishopsgate Institute (London) のHowell Collection が6巻(1869年9月号=第2回TUC特別号のみ)と7巻(1874年の8月号と10月号のみ)を所蔵している。また、British Library of Political and Economic Science (London) のウェブ・コレクションが所蔵しているのは、9巻(1879年8月号のみ)、および、1887年8月号から93年2月号までの6号分と、1895年1月号から97年8月号までの10号分である。Beatson and Clark Glass Company (Rotherham) の資料庫には9巻(1878年5月号のみ)が所蔵されているにすぎない。おそらく現存する *F. G. M. M.* の完全なセットはPrice氏所有のもののみと推測される。

注(7) *Birmingham Mercury*, April 10 1852.

るのである。

また、組合機関誌に掲載された記事や通信は、すでに編集者によって選択されたものである故に、客観性が損われてはいないかという疑問が生じるかもしれない。当然のことながら、機関誌は組合員の「不名誉な」行動を公表しなかったもので、この点の考察には他の資料が利用されねばならない。たとえば、工場内でのフロントガラス製造工による少年工にたいする虐待は、児童労働にかんする政府の調査報告書や地方新聞によって実証的に裏付けられるし、また、ボトルガラス製造工のストライキ破りに加担したフロントガラス製造工の行動は、*F. G. M. M.* には書かれていないが、ボトルガラス工組合の機関誌(1877年)が詳細に報告している⁽¹⁰⁾ので、ある程度実証しうる。要するに、*F. G. M. M.* は本研究にとって極めて重要な基礎資料であるが、他のすべての資料と同様に、注意深く扱われなければならないのである。

しかしながら、組合機関誌や各種報告書に名前が残されている労働者は極く限られているという事実にも留意する必要がある。もしもあるフロントガラス製造工が活動的な組合員であったならば、*F. G. M. M.* に常連寄稿者としてかれの名前が登場するかもしれない。もしもかれが地方名士であったならば、かれの名前はしばしば地方新聞紙上に登場するかもしれない。だが、多数の平凡なガラス工のばあいにはどうであろうか。かれの名前は史料のなかでどう残されるのだろうか。

注(8) ヴィクトリア時代の一連の王立委員会や調査審議会の調査報告書は、社会改良家の情熱によって書かれたが故に一面的であり、搾取と貧困という暗い側面のみ描いたので、歴史的資料としては慎重なる検討を要するという見解がある。(たとえば T. S. Ashton, 'Treatment of Capitalism by Historians', 1951) しかしながら、公的報告書が豊富な情報を与える重要な資料であることを否定してはならない。本論文で利用された公的報告書は以下のごとくである。

Children's Employment Commission, 2nd Report, 1843 [430] XIII; Appendix to 2nd Report, Part I, 1843 [431] XIV; Appendix to 2nd Report, Part II, 1843 [432] XV.

Children's Employment Commission, 4th Report, 1865 [3548] XX.

Select Committee, Contracts for Service of Master, Servants and Workmen, 1866 [449] XIII.

Royal Commission on Trade Unions, 10th Report, 1867-68 [3980-V] XXXIX; 11th and Final Report, 1868-69 [4123] XXXI.

Royal Commission on Factory and Workshop Acts, vol. 1, Report and Appendix, 1876 [C. 1443] XXIX; vol. V, Minutes of Evidence, 1876 [C. 1443-7] XXX.

Factory Inspectors' Reports, 1880 [C 2489] XIV; 1881 [C. 2825] XXIII.

Labour Statistics-Return of Rates of Wages, 1887 [C. 5172] LXXXIX.

(9) 新聞は労働史研究にとって不可欠な資料庫である。わたくしが参照したものうち、本稿で引用するのはつぎの新聞(および一部は定期刊行物)である。なお、特に記されていないばあいには、いずれも British Library分館 Newspaper Library (Colindale) 所蔵のものを利用した。新聞名はしばしば変化した。ここでは原則として引用記事が掲載された時点の新聞名が書かれている。*Alliance News, Bee-Hive, Birmingham and General Advertiser, Birmingham Daily Post, Birmingham Journal, Birmingham Mercury, Brierley Hill Advertiser, Brierley Hill and Stourbridge Gazette, Capital and Labour, Commonwealth, Gateshead Observer, Glasgow Sentinel, Globe, Manchester Guardian, Midland Advertiser and Birmingham Times, Morning Chronicle, Newcastle Chronicle* (September 20 1823; British Library 本館), *Newcastle Daily Chronicle, Newcastle Daily Journal, Northern Star, Operative* (1851-52; British Library 本館), *Pottery Gazette, Reynolds's Newspaper, Saturday Evening Post* (of Birmingham), *Scotsman, Stourbridge Observer, Tyne Mercury* (September 16 1823; British Library 本館)。

(10) Glass Bottle Makers of Yorkshire United Trade Protection Society, *The Quarterly Report*, no. XLVIII.

労働貴族の古典的時代におけるフロントガラス製造工

もしもかれが組合員であったならば、かれの名前と職階は組合員名簿⁽¹¹⁾に現われるだろう。かれの名前は組合の失業保険受給者名簿や死亡手当受領者名簿⁽¹²⁾にも現われるかもしれない。もしもかれの働いていた工場の賃金帳簿⁽¹³⁾が幸運にも残存しているならば、かれの賃金が判明するかもしれない。もしもかれがストライキ破りをしたならば、組合が公表した「裏切り者一覧表」⁽¹⁴⁾に現われるかもしれない。だが、大多数の労働者の工場や家庭や地域社会における生々した体験は、文献的証拠としてはいかなる痕跡も残すことなく歴史の舞台から消え去る運命にある。労働史がひとびとの労働と生活の歴史を総体として構成することを目的とするならば、工場などの生産点だけでなく、家庭や地域社会での行為も、考察されねばならないが、そのためには、労働組合の指導者だけでなく一般組合員、さらには未組織労働者の思想と行動が、戸主だけでなく主婦や子供のそれらが、さらには、地方名士だけでなく一般住民のそれらが検討されなければならない。こうした視角は、労働組合にかんしていえば、その労働組合が戦闘的であったとする一面的見解を修正し、「遅れた」意識をもつ多数の一般組合員や未組織労働者の側面をも照射することになるかもしれないし、またその逆であるかもしれない。指導者以外の人間は記録を残しにくいので、「一般の」労働者の労働と生活の状態を把握するのに伴う大きな困難は避けられない。現在のところ、人口史家が利用しているセンサス個票と教区簿冊が、労働史家にとってもこの目的のために最も有力な資料であろう。教区簿冊のなかでも結婚登録簿が、さらに10年毎に実施されたセンサス個票が、ある地域における職業分布、ある特定の職業の年齢分布、家族規模と家族内の地位、出生地からの労働移動の推測、世代間の職業の継承性と職業へのエントリーの度合、結婚類型等⁽¹⁵⁾にかんする有益な情報を提供するが、もしこ

注(11) 組合員名簿で職階を付記しているもののうち最も信頼度の高いのは1857年の名簿である。

(12) 失業保険および死亡手当の受領者名簿は、原則として *F. G. M. M.* の毎号(年四回)に発表された。

(13) 利用したガラス工場の賃金帳簿は、

a) Stevens and Williams of Stourbridge, in the Archive of the Brierley Hill Crystal Company, Brierley Hill.

b) Beatson and Clark of Rotherham, in the Archive of Beatson, Clark and Company Ltd., Rotherham.

c) Wood Bros. of Barnsley, in Sheffield Central Library. である。

(14) 1858年—59年のフロントガラス工のストライキ「裏切り者一覧表」は *F. G. M. M.*, vol. III, p. 424に載っている。

(15) 本研究で使用したセンサス個票は、Public Record Officeの *Census Enumerators' Books of 1861*, R. G. 9, Stourbridge (District or Union) no. 383=Stourbridge Town, Wollaston, Upper Swinford, Amblecote (2065, 2066, 2068), および Wordsley と Brierley Hill (2069-2074) である。そのうち、ガラス製造工と研磨工がとくに集中していた Amblecote にかんしては、1851年と1871年の *Census Enumerators' Books* も使用している。また、本研究で使用した結婚登録簿はつぎのものである。

a) *Parish Registers and Records of Old Swinford, Stourbridge, Worcestershire, 1850-75*, in Worcester County Record Office (microfilm, vol. 31-46).

b) *Register of Marriages, St. Mary's Church in the Parish of Kingswinford, Staffordshire, 1851-85*, in Dudley Reference Library (3 vols.).

c) *Register of Marriages, St. James' Church in the Parish of Wollaston, Worcestershire 1860-85*, in St. James' Church (1 vol.).

d) *Register of Marriages, Trinity Church in the Parish of Amblecote, Staffordshire, 1850-85*, in Trinity Church (3 vols.).

これらの情報を賃金帳簿や労働組合員名簿や労働組合機関誌から得られた情報とクロスさせるならば、フロントガラス製造工が生涯にわたっていかなる経験をしたか——平均的ガラス製造工は何歳でどの職階に昇進しそれに伴い賃金はどう変動していったか。また、何歳で結婚し家族規模は年齢とともにどの程度に増加していったのか。フロントガラス工は世代間でどの程度再生産され、どの程度その産業の外部からのエントリーがあったのか。ガラス工の結婚相手は同じ職種の子女であったのか、熟練労働者の子女であったのか、それとも不熟練労働者の子女であったのか。そのことは地域社会におけるガラス工の相対的地位をどの程度反映していたのか等——を明らかにしうるだろう。同時にそれは労働貴族の概念を発展・深化させ、労働貴族をめぐる論争に多少なりとも寄与しうるかもしれない。

労働貴族論にかんしては、19世紀第3・四半期のイギリス労働史理解にとって決定的重要性をもつ問題として、すでにイギリス労働史学会では一定の研究蓄積と論争がある。一方では、ペリングやマッソンのような、労働貴族の概念の歴史的現実性と分析の有効性を否定する歴史家がいる。他方では、ホブズボーム、ハリスン、グレイ、クロスィックのような、この概念の発展・深化を試みる歴史家がいる。ホブズボームには、われわれは労働貴族の「経済学的解剖」と名づけるものを負っているし、ハリスンには労働貴族の複雑な政治的行動の解明を負っている。また、グレイとクロスィックには社会学的方法による新鮮な労働貴族分析を負っている。

E. ホブズボームは、このテーマにかんする先駆的研究、「19世紀ブリテンにおける労働貴族」のなかで労働貴族を規定する6つの指標を設定した。すなわち、1)労働者の所得水準と規則性、2)社会的保障の展望、3)労働諸条件、4)上層または下層の社会階層との諸関係、5)生活の一般的条件、6)かれら自身およびかれらの子供達の将来の地位向上の展望、である。ホブズボームは最も論証可能であるという理由から、第1の指標、すなわち所得水準と規則性を重視した。ただちにかれば、労働貴族の概念規定から労働貴族の規模の大きさの問題へと論点を移行させ、その規模は、1)賃金率と、2)労働組合員数から計算可能であると主張した。賃金率からの計算結果は、1860年代に780万名の労働者階級の男子、婦人および子供の約11%が週28シリング以上を取得し、労働貴族を構成していたというものである。労働組合員数には1892年に労働者階級の20%が労働組合に組織されていたとするウェッブの数値を用いている。つづいてかれは、組織されてはいるが労働貴族には属さない構成員を、多少とも 'plausible guesses' にもとづいてその数値の半数とみなし、約10%が労働貴族を構成していたと推論したのである。⁽¹⁶⁾

R. ハリスンは、ホブズボームの議論を発展させ、労働貴族の政治的行動を分析し、その行動は、常に、どこでも、反動的勢力であったわけではなく、19世紀の第3・四半期には特定の条件のもと

注(16) Eric Hobsbawm, *The Labour Aristocracy in Nineteenth-Century Britain*, in his *Labouring Men*, 1969, pp. 273, 279.

労働貴族の古典的時代におけるフロントガラス製造工

で労働貴族は進歩的役割を果たしたことをわれわれに示した。かれはまず、カール・マルクスが第1インターナショナルの開会の辞のなかで「労働者大衆の貧困は1848年から1864年にかけて減少していない」が、「労働者階級の少数者は若干上昇した賃金を得た」と言及したことに注目する。ハリスンは、少数者が富と所得の増加から不均衡な利益を得たという主張には同意するが、19世紀の第3・四半期に生じた実質賃金の3分の1の上昇部分のすべてがその少数者によって独占的に獲得されえたか否かについては疑問を呈している。かれは、労働貴族がコーヒー、紅茶、ココア、ビール、砂糖、タバコの1人当り消費量の増大のししの分け前を獲得したことを認めるが、労働者階級の他の部分がいささかもその増加を享受しなかったならば、労働貴族が労働者階級全体の運動のヘゲモニーを握るのは、むしろヨリ困難であったにちがいないと考えるのである。ハリスンは、労働者階級内部の『貴族』と『平民』とのあいだの、組織化された者と未組織の者とのあいだの深淵の存在を認め、このことが労働運動において必ずしも労働貴族が全労働者階級の代弁者として運動を推進していったことを妨げるものではないことを強調する。すなわち、「社会的および産業的には労働貴族は多数の労働者大衆から自らを区別しようとしたけれども、政治的には労働者階級全体の真正な代弁者というポーズをとることが有効であるということをししばしば自覚した⁽¹⁷⁾」(傍線—松村)のである。ホブズボームが主として経済的次元に注意を集中したのにたいし、ハリスンは経済的・政治的・社会的次元のあいだの複雑な差異を分析したが、ハリスンが19世紀の第3・四半期に労働貴族が「黄金時代」をもったと主張するのはこのような意味においてである。ここで、ハリスンが「黄金時代」とした時期は、ホブズボームが労働貴族の「古典的時代」とした1840年から1890年に至る時期よりも短いことに注目すべきであろう。ホブズボームにおいては、帝国主義段階におけるレーニンの規定の労働貴族との対比において、ブリテンの19世紀の労働貴族を「古典的時代」のそれとしていると推測されるのにたいし、ハリスンにおいては、チャーティズムの時代との対比のなかで労働貴族の「黄金時代」が描かれている、という差異があるにしても、歴史学方法論にかかわる基本的問題が提起されている論争において、クロノロジーという基礎的事項について二人のマルクシスト労働史家のあいだに見解の一致がなく、相違点すら看過されてきたことは遺憾なことであった。ひとたび、非マルクシスト歴史家から労働貴族論否定という挑戦をうけると、ますますこうした相違点は放置されることになった。

戦後のイギリスの非マルクシスト労働史家のなかで最も優れたものの一人であるペリングは、労働貴族の概念は「歴史的眞実にとって有益であるより有害である⁽¹⁸⁾」と主張する。かれによれば、「『労働貴族』という用語は、ヴィクトリア時代およびエドワード時代の生活の観察しうる諸現象

注(17) Royden Harrison, *Before the Socialists*, 1965, p. 32.

(18) Henry Pelling, *The Concept of the Labour Aristocracy*, in his *Popular Politics and Society in Late Victorian Britain*, 1968, p. 61.

をマルクスの経済発展論と調和させようとするマルクス主義著述家たちが努めて使用することによって真に意義をもたされている。⁽¹⁹⁾」だが、ペリングは同時に、こう主張する。「マルクス主義歴史家たちは完全に誤っている。——戦闘性は貧困な労働者のあいだでよりも、裕福な労働者のあいだにみいだされるようである」⁽²⁰⁾と。ペリングの論理は混乱しており、これら双方の命題が同時には成立しえないことは明らかである。すでにホブズボームやハリスンが反批判したように、⁽²¹⁾ペリングは一方では労働貴族の概念が無意味であると主張し、他方ではそれは労働者階級の他の部分よりもいっそう急進的であったと主張しているのである。ケーキがないのに、それを食べているのである！ハリスンが指摘するように、「労働貴族の概念はマルクスやエンゲルスの発明や発見ではなく、中期ヴィクトリアの社会的・経済的文献では殆んど日常用語として使用されている。」⁽²²⁾したがって、ペリングのように、中期ヴィクトリア時代における階級構成および社会意識を特徴づける概念としての労働貴族の存在を否定するならば、労働貴族に代替する概念を提出し、当時のその「日常用語」を労働者階級のヨリ適切な分析から説明しなければならない。だが、ペリングは、なんら代替する概念を提出していないのである。『ビー・ハイヴ』*Bee-Hive*の時代の労働界は、『ノーザン・スター』*Northern Star*の時代のそれとは大きく異なっている。この変化は解明されなければならない。もしもそれが労働貴族の興起によって解明されえないならば、それに代替する仮説が提出されねばならないのである。

たしかに、ペリングの批判を許す余地がホブズボームの労働貴族10%論にあったことは認められなければならない。ペリングは、こう批判した。

「賃金統計の助けをかりても、ホブズボーム博士にとって、一連の追加的仮定をおこなえば、労働貴族を析出することは決して容易ではないということは、ただちに明らかになる。1840年から90年までの『古典的時代』においてさえも、かれは『多少とも plausible guesses』⁽²³⁾にもとづいて推論できるだけである。」

この規模の指標は、ホブズボーム自身が率直に認めたように、「ひじょうに粗雑な指標」であった。もっとも、数量的に労働貴族の規模の大きさが正確に計測されえないことが、労働貴族の存在そのものを否定することにはならない。その上層および下層とのあいだに明確な境界線を引くことができないうことが、その階層そのものが存在しなかったことをけって意味しないからである。かような「不明瞭さ」を逃れうるような階層区分の歴史的概念は存在しないのである。われわれの

注(19) *Ibid.*, p. 37.

(20) *Ibid.*, p. 61.

(21) ペリングの *Popular Politics* にたいするホブズボームの書評 (*Bulletin of the Society for the Study of Labour History*, no. 18, Spring, 1969) およびハリスンの書評 (*Victorian Studies*, vol. XIII, March 1970) を見よ。

(22) R. Harrison, *Before the Socialists*, *op. cit.*, p. 5.

(23) Henry Pelling, *op. cit.*, p. 40.

なすべき課題は、ベリングやかれにつづくマッソンのように労働貴族の存在を否定することではなく、各産業毎に、地域毎に異なっていた労働貴族の構成とその規模とを可能なかぎり実証的に明らかにし、また、時の経過とともに変化したその構成と規模を明らかにすることであろう。この点では、ハリスンがベリングによる労働貴族論批判にたいし、つぎのように指摘していることが、この論争のなかで建設的に提起された点である。「……わたくしが率直に認めたいのは、われわれがさまざまな産業における労働貴族的労働力の規模と、異なった時期におけるその成員の上昇・下降移動の度合を今まで以上にずっと多く知る必要があるということである。もしイギリス労働史研究がその現在の活力を維持すべきであるとするなら、それはますます活潑にこのような問題に取り組まなければならない。」⁽²⁴⁾

かような一連の議論にたいする価値ある貢献は、R. Q. グレイおよびG. クロシックによってなされた。かれらは地方史研究をいっそう深めることによって、ホブズボームやハリスンにより提起された全国的レベルでの論点をより鋭利に展開し、労働貴族が特殊な産業においてだけでなく、特殊な地域社会に関連したことを明らかにしたのである。かれらは経済的次元における労働者間の階層化が労働貴族形成の必要条件ではあるが十分条件ではないことを確認し、労働貴族の分析を異なったレベルで探求しはじめた。その方法は、ホブズボームの経済的次元の分析を経済決定論であるとして批判し、複合次元的アプローチへと拡大したものといってもよい。ホブズボームが一定の賃金率をもって労働貴族と「平民」の境界線とみなしたのにたいし、グレイは、たとえばニューカッスルで週25シリング取得する労働者とロンドンで週40シリング取得する労働者は、その地域社会における他の労働者との相対的關係においては同等の地位を占めたかもしれないので、全国一律の境界線をひくこと自体無意味であると批判するのである。すなわち、「『貴族』という用語の使用は社会的・文化的境界線を意味している」のであって、地域社会における社会的・文化的次元の分析をもって労働貴族の形成の十分条件とみなすのである。グレイは、対象とする地域社会としてエディンバラを選定し、19世紀後半の熟練労働者の生活様式——居住地域と社会階層との対応、労働者の熟練度の相違による結婚類型の差異、労働者の余暇活動等——に分析の力点をおいた。⁽²⁵⁾ クロシックは、1840年から80年にかけて、かれがケンティッシュ・ロンドンと名づける地域の労働者の思想と行動を、その地域の友愛組合、協同組合、教会等の組織への参加のしかたを中心に分析し、労働貴族を社会学的に析出した。その結果、労働貴族がヴィクトリア時代の節約・勤勉という類の

注(24) マッソンは労働貴族が「新型組合」とともに 'the great labour legends' であるとしている。(A. E. Musson, *British Trade Unions 1800-1875*, 1972, p. 55). A. E. Musson, *Trade Union and Social History*, 1974, chap. 1 もみよ。

(25) R. ハリスン「近代イギリス政治と労働運動」, 1972年(未来社), 日本語版への序文, 11-12 ページ。

(26) R. Q. Gray, *Class Structure and the Class Formation of Skilled Workers in Edinburgh, C. 1850-C. 1900*, Ph. D. thesis, Edinburgh University. この論文の概要は R. Q. Gray, *The Labour Aristocracy in Victorian Edinburgh*, 1976. として刊行されている。

中産階級のイデオロギーを共有していたとする従来の定説を批判することとなり、労働貴族は独自のイデオロギーを形成し行動していたという結論を導きだすが、その研究の実証性はきわめて高いものである。⁽²⁷⁾ また、G. ステドマン・ジョーンズのロンドン労働史研究や、E. ホプキンスのスタウァブリッジ労働史研究は、労働貴族論研究という視角はグレイやクロスィックより弱いけれども、それぞれ労働貴族像の構成にも寄与している。⁽²⁸⁾ 地方労働史研究の成果から直接ヴィクトリア社会の労働貴族像を構成することには飛躍があろうが、「特殊な労働者階級の価値観の意味が再解釈されるのはかような地方史研究を通してのみである」というクロスィックの主張に、わたくしも賛意を示すものである。

わたくしの研究は、スタウァブリッジに特別の注意が払われているが、ある特定の地方労働史の研究ではなく、フロントガラス産業における研究である。ある特定の産業を選定し、労働貴族論の視角から分析した研究は、まだ他に現われていないので、産業別比較研究をなすには困難があるが、E. ホプキンスのスタウァブリッジ労働史研究は、わたくしの研究とクロスする。本論中で詳しくのべるように、スタウァブリッジはフロントガラス業の中心地の一つであり、ホプキンスがその地域のさまざまな労働者グループの社会的・相対的位置関係を明らかにし、したがってガラス工のその地域における他の職種の労働者との関係も明らかにされるのにたいし、わたくしの研究では、スタウァブリッジのガラス工と他の地域のガラス工との相対的關係が分析の対象とされる。ホプキンスは、スタウァブリッジにおける労働者階級内部の対称的グループとして、ガラス製造工と釘製造工を分析し、労働の場においても(一方は工場労働であり、他方は家内労働である)、賃金においても、生活様式や居住地域においても、両者は異なる階層として存在したことを明らかにした。わたくしの研究では、西部ミッドランド、とくにスタウァブリッジのガラス製造業は良質のガラス器を生産し、熟練労働者を蓄積させたが、事態はニューカッスルやマンチェスター、さらにヨークシャーの諸小都市においては異なっていたことが示されるであろう。そしてそのことが、ガラス工の労働組合の組織率や、組合による徒弟規制や昇進規則にいかなる影響を与えたかが分析されるであろう。地方史研究と産業別研究は排他的でなく、相互に補完的でなければならないのはいうまでもない。

労働貴族研究の蓄積が、以上に要約したものであるならば、いかなる視角からフロントガラス製造工の分析がなされるべきであろうか。労働貴族は労働者階級の上層部分であるが、そのことは、

注(27) Geoffrey Crossick, *Social Structure and Working-Class Behaviour: Kentish London, 1840-1880*, Ph. D. thesis, London University 1976. その一部は G. Crossick, *The Labour Aristocracy and Its Values: a Study of Mid-Victorian Kentish London*, in *Victorian Studies*, vol. 19, 1976, として発表されている。

(28) G. Stedman Jones, *Outcast of London*, 1971. Eric Hopkins, *The Working Classes of Stourbridge and District, 1815-1914*, Ph. D. thesis, London University, 1972. 一部は E. Hopkins, *Small Town Aristocrats of Labour and their Standard of Living, 1840-1914*, in *Economic History Review*, sec. ser., vol. 28, 1975. および *Working Conditions in Victorian Stourbridge*, in *International Review of Social History*, vol. 19, 1974. などに発表されている。

労働者階級の他の部分および中産階級との相対的關係として理解されねばならないことを意味している。労働貴族は、労働の場や地域社会で、労働者階級の他の構成員から「ヨリ優秀な」集団として自らを区別するものである。従来の研究はかような労働貴族を、経済的・政治的・社会的次元から分析したが、互いに他の次元を軽視していたという弱点を有していた。その結果、ホブズボームは経済決定論に陥っていたし、ハリスンも政治過程重視に偏っていた。また、グレイとクロスィックは新鮮な分析視角を導入したけれども、その社会学的視点の重視のために、経済的次元での労働貴族形成の条件を、その必要条件と指摘はしていても、実証的には充分解明しえなかった。クロスィックは、労働貴族の規模推計にかんして、「もしも労働貴族の存在がペリングが要求するような、正確な数量的測定によって証明されなければならないならば、その作業は可能ではない⁽²⁹⁾」とまでいいきっている。前述したごとく、労働貴族の数量的「不明確さ」がただちに労働貴族の存在そのものを否定することにはならない。しかしながら、クロスィックの論文の弱点は経済的側面の分析が不十分である点にあるのであって、これは、第一に、かれの対象とした地域に所得にかんするデータが欠知していたためであり、第二に、労働貴族の社会的側面をかれが余りにも重視しすぎたためである。各々の地域の、各々の産業における賃金統計の分析は必要不可欠なのであって、クロスィックのように、労働貴族の数量的測定を放棄することによって、ペリングによるホブズボームの労働貴族規模推計が不明瞭であるとする、前述した批判に応えるのは誤りである。ここで労働貴族の社会学的分析の流行にもかかわらず、そして、その社会学的分析の意義を充分認めるにもかかわらず、労働貴族存在の基本的条件は生産点にあることが再認識される必要があろう。この経済的分析を基礎として、政治的次元での分析と社会的次元の分析とを統一して理解しなければならない。もとよりそれを全産業レベルや全国的レベルでおこなうことはできない。わたくしの研究は、フロントガラス産業という一産業をとりあげて、経済的・政治的・社会的分析を可能な限り統一的におこなおうと試みたものであり、そこでは Concentric Circle Approach と呼びうる分析方法が採用されている。この方法は、ある労働者集団が他の人間と関連する範囲を、最小限の労働単位から、工場、産業、地域社会、さらに「階級と社会」へと拡大しつつ考察し、労働貴族の形成過程と他の者へのかれらの変化していく態度を検討しようとするものである。

本稿は二つの部分に分けられる。第1篇は、主としてフロントガラス産業とフロントガラス製造工にかんするものであり、第2篇は、フロントガラス製造工組合にかんするものである。だが、フロントガラス製造工の行動はかれらの労働組合活動と関連しているので、この篇構成は人為的なものにすぎない。本誌で展開される予定の本論の構成は、以下のごとくである。

第1篇 生産点におけるフロントガラス製造工

第1章 フロントガラス産業とフロントガラス製造工

注(29) G. Crossick, Social Structure……, *op. cit.*, p. 219.

- 第1節 1850年以前のガラス産業の発展
- 第2節 19世紀第3・四半期におけるガラス産業
- 第2章 フリントガラス工場内の労働状況
 - 第1節 フリントガラスの生産工程
 - 第2節 労働時間
 - 第3節 賃金支払い方法
 - 第4節 その他の労働諸条件
- 第3章 フリントガラス製造工と近隣者たち
 - 第1節 フリントガラス製造工の階層化
 - 第2節 フリントガラス製造工と研磨工
 - 第3節 フリントガラス製造工とボトルガラス製造工
- 第2篇 フリントガラス製造工友愛組合
 - 第4章 組合の構造と発展
 - 第1節 遍歴職人組合から『新型』組合へ
 - 第2節 組合の構成員
 - 第3節 組合の財政制度
 - 第4節 組合の統治組織
 - 第5節 労使関係の変化と影響
 - 第5章 組合の諸政策
 - 第1節 徒弟規制と昇進統制
 - 第2節 共済制度
 - 第3節 移民
 - 第4節 生産的協同組合
 - 第6章 フリントガラス製造工と労働運動
 - 第1節 ジョセフ・レスターとアレクサンダー・キャムベル
 - 第2節 ジャンタ派, ポッター派, および, フリントガラス製造工組合
 - 第3節 選挙法改正運動
 - 第4節 主従法撤廃運動
 - 第5節 労働組合の存亡の危機のなかで
 - 第7章 結論

第1章では、フリントガラス産業の歴史がガラス産業全体の発展史のなかで素描される。そして、

フリントガラス産業が19世紀第3・四半期に「黄金時代」を迎え、製造工が労働貴族として存在する経済的条件が形成されたことを明らかにする。さらに、ガラス産業の中心地が製品の種類に応じて異なり、時の経過にともないその中心が地域的に移動する歴史が辿られ、ミッドランド、とくにスタウァブリッジとパーミンガムがフリントガラス製造の中心地となったこと、19世紀の第3・四半期にはその傾向がますます強化されたことが示される。

第2章では、フリントガラスの生産工程が略述され、さらに、労働時間、賃金支払い方法、その他の労働条件のいずれにおいても、他の産業にはみられない特異な形態が存在していたことが示される。そして、この産業に根強く残る労働慣習を変更しようとするいかなる試みにたいしても、ガラス製造工が抵抗していった事実が明らかにされる。かくして、ガラス製造工内部の序列支配形成の必要条件が、すでに生産点で蓄積されていることが認識されはじめるだろう。

第3章ではこの点が展開され、労働貴族形成の過程が明らかにされる。フリントガラス生産では、『チェアー』“Chair”とよばれる4人からなる集団が労働の最小限単位として機能していたが、この『チェアー』内部の4種類の職階のあいだの、必要とされる技術水準の差異、およびそれを反映する賃金格差の存在と支配・被支配の関係の成立のなかに、労働貴族成立の最も基本的な条件が求められる。4つの職階間の賃金格差は本研究が対象とする期間に拡大したのだろうか、それとも縮小したのだろうか。また、1人のフリントガラス製造工は一生涯のうちにいかなる社会的・経済的経験をするのだろうか。これらの問いに答えるために、フリントガラス産業へのエントリーの年齢、昇進年齢、結婚年齢と家族規模の増加、賃金上昇の度合、子供の労働力化、退職および死亡の年齢等々が検討され、スタウァブリッジにおけるフリント・ガラス製造工の生涯史の構成が試みられる。その平均像は、一般筋肉労働者のそれとは著しく異なり、労働貴族の特質が析出されるのである。つづいて考察の範囲は、工場内のガラス研磨工やボトルガラス製造工とフリントガラス製造工との特殊な関係へと拡大され、フリントガラス製造工が、熟練工ではあるが相対的には技術水準の低い隣接したガラス産業労働者と比較されることによって、自らを優越した地位にあると認識していく過程が分析される。これこそ労働貴族意識の強化される過程に他ならない。

第4章では、フリントガラス製造工友愛組合の構造が分析される。⁽³⁰⁾ 19世紀前半に断続的に遍歴職

注(30) フリントガラス製造工組合の *Rules and Regulations* は数度にわたって変更されたが、組合が再建された1849年のものは発見できなかったため、ウェブの書き抜き帳の該当部分に依拠した。他の年度のもの各地に分散しているが、所在地は以下の通りである。1859年6月改訂のもの—Brierley Hill Library, 1859年4月改訂のもの—Birmingham Reference Library, 1867年6月改訂のもの—*Royal Commission on Trade Unions, 11th and Final Report 1868-69* (P. P. XXXI), vol. II, Appendix, pp. 259-62. に収録, 1874年7月改訂のもの (1877年3版)—Webb Coll. Section C, vol. 42, X, at the British Library of Political and Economic Science. これらによって、本研究の対象期間の組合の *Rules and Regulations* の改訂部分をすべて辿ることができる。なお、以下のガラス産業の関連労働組合の *Rules and Regulations* は、Webb Coll. Section C, vol. 42 にある。

The London Glass Blowers' Trade Society, 1875, (vol. 42, IV). The United Flint Glass Cutters' Mutual Assistance and Protective Society, 1887, (vol. 42, VIII).

The Pressed Glass Makers' Friendly Society of the North of England, 1874, (vol. 42, XVI, XVII).

人組合として存在したフロントガラス製造工組合が、1849年にいわゆる「新型組合」New Model Unionとして再組織された経過が明らかにされたのち、組合はフロントガラス製造工のいかなる階層まで組合員資格を与え、実際にはどの程度組織化が実施されたのかが検討される。そこでは、組合はどの程度労働貴族の組合として刻印されたのか、また、組織化の地域的差異はどの程度そのことを反映しているのか、といった点に注意が払われる。さらに「新型組合」の特徴である強固な財政基盤の確立と全国的中央集権的統治、そこから生じる地方的・伝統的自治との対立、換言すれば、効率的永続的執行部の確立と「プリミティヴ・デモクラシー」との対抗関係と、それを回避しようとした方策についての検討がなされる。つづいて、当該期間中の労使関係の変化が考察され、中期ヴィクトリア時代の労働組合を労使協調主義一色に塗りつぶす通説に批判を加え、とくに1858年—59年のフロントガラス製造工の大ストライキの原因、展開、および影響が解明される。当時の労働争議のなかでは例外的ともいえる労働者側のほぼ完全な勝利に終わった6ヶ月におよぶこのストライキは、建築工ストライキ（59—60年）やロンドン労働組合評議会 London Trades Council の成立（61年）にも影響を与えたのである。

第5章では、組合の主要な政策、すなわち徒弟規制、工場および地域間の労働移動統制、昇進規制、移民、さらに生産的協同組合の創設計画が検討され、フロントガラス製造工組合が、組織構造のうえでも、政策のうえでも、典型的な「新型組合」であることが明らかにされる。

第6章では、フロントガラス製造工が、主として1860年代に、全国的レベルでの労働運動といかにかかわったかを、他の労働組合の闘争の支援、主従法撤廃運動、選挙法改正運動（第二次）、労働組合法制定の運動と TUC の成立などを考察することによって明らかにしたい。そこでは60年代中期のイギリス労働運動史を特徴づけた、ジャンタ派とポッター派との対立に焦点を合わせ、フロントガラス製造工組合が G. ポッターを支持したことが明らかにされる。とすれば、ウェブによる中期ヴィクトリア労働組合像の定式化——すなわち、「新型組合」は1860年代にジャンタ派に結集し、伝統的・地方的旧組合はポッター派に結集されたという通説——は一定の修正を受ける必要があることになろう。もしもフロントガラス製造工組合が「新型組合」の典型例であるならば、いかにして、また何故に、『ビー・ハイヴ』*Bee-Hive* と G. ポッターとに強い関係をもったのだろうか、という問題である。しかしこのことは、ウェブの「新型組合」論を「歴史的虚構」であるとし、ジャンタ派とポッター派の対立をたんなる個人的感情の対立（とりわけ R. アプルガースと G. ポッターとの対立）として理解する、マッソン、アレン、クレッグ、クレメンツなどの見解をわたくしが支持することを意味しない。わたくしの見解はマッソン達とは逆である。この一見矛盾するように見えるわたくしの見解は、本論のなかで詳述されるであろう。（続）

（経済学部助教授）